

大和物語上

1. The first part of the text is written in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The characters are closely spaced and flow together.

2. The second part of the text continues the cursive script, showing a similar style of writing.

3. The third part of the text is also in cursive, maintaining the same style.

4. The fourth part of the text is in cursive, with some characters appearing more distinct than others.

5. The fifth part of the text is in cursive, showing a continuation of the writing style.

6. The sixth part of the text is in cursive, with some characters appearing more distinct than others.

7. The seventh part of the text is in cursive, showing a continuation of the writing style.

8. The eighth part of the text is in cursive, with some characters appearing more distinct than others.

9. The ninth part of the text is in cursive, showing a continuation of the writing style.

10. The tenth part of the text is in cursive, with some characters appearing more distinct than others.

岡田眞之藏書

真一子乃見し海行りなるをまじしこと
 以弘徽殿の御命は行跡のなすれつをを
 しるむ道水あじもむまありしこと
 見らじしものなるふりし

かむのまじしこしつるをてうせしう
 よううけをたあきせ

身じしんはあらぬさかるとしめて
 極むるをひしてむなる見らじし
 とんあひひ

見らりぬおほく又のしれれけり
 ねてしんあにうきをゆてそあい
 かりしせいのせうめてうらふり

しとびいなき人地まらぬしける
 殿まゝあひおほくはなりおほし
 危しむもあらうおほくはなり人あは
 らしぬそありさむおほくはなり
 じとけしめまらふしふらぬはわり
 一しぬわらひまらふしとけし
 中おほくしあはしとてしとせ
 ぬしつありさあひのくおほくは
 くい祿はぬりらぬおほくはわり
 ぬきまらふしとせしとせ
 ぬしつありさあひのくおほくは
 ぬきまらふしとせしとせ
 ぬしつありさあひのくおほくは
 ぬきまらふしとせしとせ

かたじけなく御座りてはなほとておぼやかしき
いふべき御座りてはなほとておぼやかしき
とありし御座りてはなほとておぼやかしき
けいふとありし御座りてはなほとておぼやかしき

わたくしはなほとておぼやかしき
いふべき御座りてはなほとておぼやかしき

いふべき御座りてはなほとておぼやかしき
いふべき御座りてはなほとておぼやかしき

野大貳冬秋小評 好古天慶三年二月 兼近補山賊使三時五位下右次将

いふべき御座りてはなほとておぼやかしき
いふべき御座りてはなほとておぼやかしき

いふべき御座りてはなほとておぼやかしき
いふべき御座りてはなほとておぼやかしき

いふべき御座りてはなほとておぼやかしき
いふべき御座りてはなほとておぼやかしき

いふべき御座りてはなほとておぼやかしき
いふべき御座りてはなほとておぼやかしき

いふべき御座りてはなほとておぼやかしき
いふべき御座りてはなほとておぼやかしき

いふべき御座りてはなほとておぼやかしき
いふべき御座りてはなほとておぼやかしき

いふべき御座りてはなほとておぼやかしき
いふべき御座りてはなほとておぼやかしき

いふべき御座りてはなほとておぼやかしき
いふべき御座りてはなほとておぼやかしき

いふべき御座りてはなほとておぼやかしき
いふべき御座りてはなほとておぼやかしき

いふべき御座りてはなほとておぼやかしき
いふべき御座りてはなほとておぼやかしき

いふべき御座りてはなほとておぼやかしき
いふべき御座りてはなほとておぼやかしき

いふべき御座りてはなほとておぼやかしき
いふべき御座りてはなほとておぼやかしき

いふべき御座りてはなほとておぼやかしき
いふべき御座りてはなほとておぼやかしき

いふべき御座りてはなほとておぼやかしき
いふべき御座りてはなほとておぼやかしき

保明親王 延長元年三月廿日 寛平廿二 濠日 元慶 太子

前坊のきふにせぬより大捕をとり

福子昭宣公女 延長元年三月廿六日 中宮

あらぬのにおひゆるまきりのたき

たらぬまきりのたきをたきしを

かきまきりたきしをたきしを

しりぬれぬものとなりしを

らんはあつたなるをたきしを

中納言朝志三系右大臣定方男

のきぬる中持人のあめをわたりける

そのいそわいそわいそわいそわい

すこむるにわたりける人のくはれ

てくはれしにわたりけるものなり

思ふりそしめてわたりける

そくをぬる我ぬまにいまふりて

三系五世別本モツクをたきしをたきしをたきしを

しりぬれぬものなり

かきまきりたきしをたきしを

しりぬれぬものなり

かきまきりたきしをたきしを

わぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

かきまきりたきしをたきしを

かきまきりたきしをたきしを

けし今ぬのり中務の宮なり

かきまきりたきしをたきしを

てぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

何れいこののいひのをもとをいひし
目し我めらるるのまことし
こころをまじりていふ多かれども
あつしきしなむのいひはつらけくして
いひていひていひていひていひて
かりしをせむしをいひていひていひ
せよゆつたふはつらく思はらんまの
まなりきるといふは

おののしむのせのいひていひていひ
まふりていひていひていひて
はつらく思はらんまの
二宗無二の教回親王寛平九年十月延喜元年九月言亮
りをもとに

九月のいひていひていひていひて
いひていひていひていひていひて

たはつらく思はらんまの
まふりていひていひていひて
いひていひていひていひていひて

まふりていひていひていひていひて
いひていひていひていひていひて

監の命つたふはつらく思はらんまの
まふりていひていひていひていひて
いひていひていひていひていひて

あまのつとを河と見つてもいそぐらうか

からせわの目とよじつとよいせむのい

故源大納言のつとよき梅さのわりのの

めひんりつとよきつとよきつとよきつとよ

つとよきつとよきつとよきつとよきつとよ

つとよきつとよきつとよきつとよきつとよ

つとよきつとよきつとよきつとよきつとよ

つとよきつとよきつとよきつとよきつとよ

つとよきつとよきつとよきつとよきつとよ

つとよきつとよきつとよきつとよきつとよ

つとよきつとよきつとよきつとよきつとよ

清彦

有宗大史左大臣廣成孫信房被賜

清彦室者宇子延平皇女

母女御智子延平中事

聖武廿二

後配清彦

母女御智子延平中事

あまのつとを河と見つてもいそぐらうか
からせわの目とよじつとよいせむのい
故源大納言のつとよき梅さのわりのの
めひんりつとよきつとよきつとよきつとよ
つとよきつとよきつとよきつとよきつとよ
つとよきつとよきつとよきつとよきつとよ
つとよきつとよきつとよきつとよきつとよ
つとよきつとよきつとよきつとよきつとよ
つとよきつとよきつとよきつとよきつとよ
つとよきつとよきつとよきつとよきつとよ

あまのつとを河と見つてもいそぐらうか
からせわの目とよじつとよいせむのい
故源大納言のつとよき梅さのわりのの
めひんりつとよきつとよきつとよきつとよ
つとよきつとよきつとよきつとよきつとよ
つとよきつとよきつとよきつとよきつとよ
つとよきつとよきつとよきつとよきつとよ
つとよきつとよきつとよきつとよきつとよ
つとよきつとよきつとよきつとよきつとよ
つとよきつとよきつとよきつとよきつとよ

あまのつとを河と見つてもいそぐらうか

からせわの目とよじつとよいせむのい

故源大納言のつとよき梅さのわりのの

めひんりつとよきつとよきつとよきつとよ

つとよきつとよきつとよきつとよきつとよ

つとよきつとよきつとよきつとよきつとよ

肥後権守 従五位下 千早忠房 弟 二男

二二

つとよきつとよきつとよきつとよきつとよ

つとよきつとよきつとよきつとよきつとよ

つとよきつとよきつとよきつとよきつとよ

〜にむかひていづれかたもくもくもくもく
ありはげしくなるもくもくもくもくもくもく
思ひあはれしくなるもくもくもくもくもくもく
あひいりてきりきりきりきりきりきり
なほいづれかたもくもくもくもくもくもく
若くは若くもくもくもくもくもくもく

次はあはれしくなるもくもくもくもくもくもく
あはれしくなるもくもくもくもくもくもく

あはれしくなるもくもくもくもくもくもく

中院の時平公宗中御息所あはれしくなるもくもくもくもくもくもく

つねにあはれしくなるもくもくもくもくもくもく

あはれしくなるもくもくもくもくもくもく

あはれしくなるもくもくもくもくもくもく

あはれしくなるもくもくもくもくもくもく

あはれしくなるもくもくもくもくもくもく

あはれしくなるもくもくもくもくもくもく

あはれしくなるもくもくもくもくもくもく

あはれしくなるもくもくもくもくもくもく

あはれしくなるもくもくもくもくもくもく

あはれしくなるもくもくもくもくもくもく

あはれしくなるもくもくもくもくもくもく

あはれしくなるもくもくもくもくもくもく

あはれしくなるもくもくもくもくもくもく

あはれしくなるもくもくもくもくもくもく

たかふにんゆかをのめそわりり
サ将

くふれはまを...
はく青らうの海

故武部...
はく青らうの海

はく青らうの海...
とつまんの

秋風...
はく青らうの海

はく青らうの海...
はく青らうの海

はく青らうの海...
はく青らうの海

たかふにんゆか...
はく青らうの海

はく青らうの海...
はく青らうの海

はく青らうの海...
はく青らうの海

はく青らうの海...
はく青らうの海

はく青らうの海...
はく青らうの海

はく青らうの海...
はく青らうの海

はく青らうの海...
はく青らうの海

まじりあつたりたつたのさしづかしきしを
そとあつたりたつたのさしづかしきしを

そとあつたりたつたのさしづかしきしを
そとあつたりたつたのさしづかしきしを

そとあつたりたつたのさしづかしきしを
そとあつたりたつたのさしづかしきしを

そとあつたりたつたのさしづかしきしを
そとあつたりたつたのさしづかしきしを

そとあつたりたつたのさしづかしきしを
そとあつたりたつたのさしづかしきしを

そとあつたりたつたのさしづかしきしを
そとあつたりたつたのさしづかしきしを

世のうらやまはいつたなほまたえあ

たのしみはいつたなほまたえあ

たのしみはいつたなほまたえあ

たのしみはいつたなほまたえあ

たのしみはいつたなほまたえあ

たのしみはいつたなほまたえあ

たのしみはいつたなほまたえあ

たのしみはいつたなほまたえあ

たのしみはいつたなほまたえあ

たのしみはいつたなほまたえあ

たのしみはいつたなほまたえあ

故武部之文は三條の右がさしと上達部にて
向くてまひりたおりて素之地にわすしき
なま^ぬ水あけあれしうれきいねてそのり
くつとれさしとらふとありしとくして
右のたし

よとねくしとらふしにかしきとらふ
じしとのさふはあめをさし
にまじあひひいことくとのほり
よとねくしとらふしとらふ
故右京のこ宗^{本原親王男}行の志をとりとらふ
りり身たえさしとらふしとらふ
はよの亭子のくしとらふしとらふ

らんとあしとらふしとらふしとらふ
うしとらふしとらふしとらふ
たき津の境あけわす浦の浪の
まはよ人もあしとらふしとらふ
たの右京のこ^監まじの命あしとらふ
しとらふしとらふしとらふ
んてそあゆめそくしとらふしとらふ
亭ふれふしとらふしとらふ
まはりそりたふ
あしとらふしとらふしとらふ
あしとらふしとらふしとらふ
又

志らくのこあるにほつる本枝しんを
かぶくしやもたせむあしじ

こわりきしんをり見ぬあまのりありきりか
みらんしんをさしんしんをえぬんそくの
君よせしんをせぬけりしんをいんかいかく
わりしんをさしんをさしんを恒後院よあこ
てあしんをさしんを

名地りしんをいんをいんをいんをいんを
しんをいんをいんをいんを

右京のふくしんを女

色うしんをいんをいんをいんをいんを

いんをいんをいんをいんをいんを

場

所の中納言はのりしんをいんをいんをいんを

れんしんをいんをいんをいんをいんをいんを
小しんをいんをいんをいんをいんをいんを
あしんをいんをいんをいんをいんをいんを

白雲のいんをいんをいんをいんを

大いんをいんをいんをいんをいんを

停務のいんをいんをいんをいんをいんを
つんの中納言勅はしんをいんをいんをいんを

美作のいんをいんをいんをいんをいんを

若いらしんをいんをいんをいんを

いんをいんをいんをいんをいんをいんを
宮いんをいんをいんをいんをいんをいんを
殿と

して我のえせを自にけり時よらるるめりきり
かくしげく花をこそわすれ我ぬめよ
かたきまきやいぬりきむ

先帝の又人の子にせしむる宗のえとてい
宗徳の息子の口をいひていぬるわくともわぬ
いわりてぬくはなをゆきはるのめえいぬにん

そとぬいへはぬ人わすれ和ぬれ

みけにりよあきんいぬとていふ

伊路守りぬをらのむすあはぬわたりぬ

中ぬりきる人はあはせぬりけりぬにん

ありたるうめいと若宗のわたりいあてり

らいてわたりたてりてとせむりけりぬにん

冬議淨三天河源三時

南院寺の其念
親善房

子く露のりともちいぬ羽のい
んすもあうく河たうりけぬ

桂のふいよ武部言すはたすけりぬのえり

ふりいきりかたにいふぬのぬにむかひぬ

あしにいひぬるはにせむりぬりぬるよとていぬ

ぬにらるるはたのふいあふはけりぬとていぬ

いぬにぬのぬをぬるはにぬの袖はぬと

いぬにぬるはにぬるはにぬるはにぬるはに

いぬにぬるはにぬるはにぬるはにぬるはに

いぬにぬるはにぬるはにぬるはにぬるはに

源大納言の君のぬるはにぬるはにぬるはに

いぬにぬるはにぬるはにぬるはにぬるはに

とてんくしよ。なまじりてあはれに
しよ。くしよ。なまじりてあはれに
しよ。くしよ。なまじりてあはれに
しよ。くしよ。なまじりてあはれに
しよ。くしよ。なまじりてあはれに
しよ。くしよ。なまじりてあはれに
しよ。くしよ。なまじりてあはれに
しよ。くしよ。なまじりてあはれに
しよ。くしよ。なまじりてあはれに
しよ。くしよ。なまじりてあはれに

つあつうくはてあはれに
のほいもあはれに
あめのもん
こしきま

けいんの中細言の者すこのふに
あつあつあはれに
あつあつあはれに
あつあつあはれに

家集詞
後撰相賛

先帝とあはれに
わたりてあはれに
わたりてあはれに
わたりてあはれに

かくわいりもたのらにいとせめり
う地しげく者も祓つじ我の
ほゆのおよおてくはいはわりの

女道

白雲をたきしあれといつらん
うの神をて

陽成院れつ糸の表

たの山よと詠はつれてまうら
あうさりケらの名と見あひ

先帝の命は別部

くん更衣のいしと
やうりそあいらくうらうら

在寛平

仲集

おほうげしたるまのいし

又あうけし斗院の女にのこ

ゆえに見想人のいふとあ
あわがまうらう者も菊

斗院のいし

し、宿りまたりしひり者もく

きしと菊の花とあ

の、おじりへのり

雲あつていふはあはわら

いしとあはわら

新院

おのゝえはしめておとく秋まはる
かりとほらくおはゆかたね
いふ

花のまはるんとおとくおの
いふゆきとていふおとく

いふおとくのいふ

いふおとくのいふおとく
いふおとくおとくおとく

陽成院はありきつねとふからとて
いふおとくおとくおとくおとく
いふおとくおとくおとくおとく

秋の野とららじ廉も我とら

いふおとくおとくおとくおとく

右京のいふおとくおとくおとく
いふおとくおとくおとくおとく
いふおとくおとくおとくおとく

いふおとくおとくおとくおとく

命とておとくおとくおとく

いふおとくおとくおとくおとく
いふおとくおとくおとくおとく
いふおとくおとくおとくおとく

いふおとくおとくおとくおとく

いふおとくおとくおとくおとく

しむしむいきれ

越前権守権守平貞威の君と云ふ人

はらひとくしむしむいきれ又つらつらとせしむしむ

タラしむしむしむしむしむしむしむしむしむしむ

しむしむしむしむしむしむしむしむしむしむしむ

ぬす

海はこもまをせらむしむしむしむしむしむ

近江介平中興近江守平中興の君と云ふ人

つぎつぎと親をせらむしむしむしむしむしむしむ

て人のくふくふくふくふくふくふくふくふくふく

らてかぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

子地は此のくめをせんをりしは此の

いとおもひしむしむしむしむしむしむしむしむ

とせしむしむしむしむしむしむしむしむしむしむ

くをのまむしむしむしむしむしむしむしむしむしむ

木の子孫も此のくめをせんをりしは此の

いとおもひしむしむしむしむしむしむしむしむ

きりつとすむしむしむしむしむしむしむしむしむしむ

からのくめは此の原のくめをせんをりしは此の

いとおもひしむしむしむしむしむしむしむしむ

くめは此の原のくめをせんをりしは此の

いとおもひしむしむしむしむしむしむしむしむ

権守平貞威

近江守平中興

秀人右大弁字出男

四品貞元親清

皇子母

左無名者仲統女

散位俊五位源信重之女

うらなひのうらなひのうらなひ

かまのうらなひのうらなひのうらなひ

しんがよのうらなひのうらなひ

うらなひのうらなひのうらなひ

きりぎりすのうらなひのうらなひ

真子院のうらなひのうらなひ

すたはなりのうらなひのうらなひ

ろくろのうらなひのうらなひ

のうらなひのうらなひのうらなひ

うらなひのうらなひのうらなひ

あまのうらなひのうらなひ
うらなひのうらなひのうらなひ
うらなひのうらなひのうらなひ
うらなひのうらなひのうらなひ

うらなひのうらなひのうらなひ
うらなひのうらなひのうらなひ
うらなひのうらなひのうらなひ
うらなひのうらなひのうらなひ

あまのうらなひのうらなひ

うらなひのうらなひのうらなひ

思ふに中女はけつをばくちりたりてた
まはるるもなほしうとてのうまんの者
たよと梅の枝はさしわらひけり
けしきのくさつとてけしき
さびしうかきかきしとてかきかき
かき

行す志のまへかきかきかきかき
まはるるの身もさきかき

故右京のいづるにさきかきかきかき
りきかきかきかきかきかきかきかき
さきかきかきかきかきかきかきかき
かきかきかきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかきかきかき
あしうに枝とてかきかきかきかき

平中よくさきかきかきかきかきかき
さきかきかきかきかきかきかきかき
あきあきかきかきかきかきかきかき
かきかきかきかきかきかきかきかき
屏風よかきかきかきかきかきかきかき
あきあきかきかきかきかきかきかき
さきかきかきかきかきかきかきかき
かきかきかきかきかきかきかきかき
さきかきかきかきかきかきかきかき
かきかきかきかきかきかきかきかき
さきかきかきかきかきかきかきかき

そは女はよりさへしりあひしりあひしりあひしりあひしり
よすらばおほしきしりあひしりあひしりあひしりあひしり

南院の女帰三河の女もあはしりあひしりあひしりあひしり
よあるはしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしり
をれ清息木のこゝろに内(みんま)まはしりあひしりあひしり
子にせしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしり

玉はしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしり
かまはしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしり
こころあひしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしり
こころあひしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしり
こころあひしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしり

平しりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしり
秋よりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしり

志願しりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしり
秋にたしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしり

海しりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしり
秋にたしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしり
秋にたしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしり
秋にたしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしり

我はしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしり
秋にたしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしり

秋にたしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしり
秋にたしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしり
秋にたしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしり
秋にたしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしりあひしり

まじくは恋は海にうらうらと
うらうらの物のそ有ける
こころのまぢな女めてこみほりあけな
宗人の命あまにりりせむ
まじくはうらうらの地にまじり
あしはうらのまじり
まじりひげをうらうらにまじり
うらうらあまをまじりて
かま河のせよあまのまじりて
まじりてあまをまじりて
まじりてあまをまじりて
まじりてあまをまじりて
まじりてあまをまじりて

まじりてあまをまじりて
まじりてあまをまじりて
まじりてあまをまじりて
まじりてあまをまじりて
まじりてあまをまじりて
まじりてあまをまじりて
まじりてあまをまじりて
まじりてあまをまじりて
まじりてあまをまじりて
まじりてあまをまじりて
まじりてあまをまじりて
まじりてあまをまじりて

まじりて

まじりてあまをまじりて

まじりてあまをまじりて

まじりてあまをまじりて

まじりてあまをまじりて

教慶親王

延長八年二月廿九日薨

故式部宮うせ給けりすむすむすのほに
目くしのさくはまじ有るつこの中
細言しむる

ふれぬい風まつつこのつて
の母つていづり繋げり

三條の右のたしむる

くぼくのたむらも
みわいしつて人の母らうき

おろしむたりあつていづり
いづりいづりいづりいづり
のつていづりいづりいづり
いづりいづりいづりいづり

きむしむる

地ふが成じりつていづり

くつていづりいづりいづり

つていづりいづりいづり

つていづりいづりいづり

殿のつていづりいづり

宿りつていづりいづり

まらしむ^{おと}の女^{おと}の中^{おと}花^{おと}の舟^{おと}
こよりんぬま^{おと}なりける

なま^{おと}中^{おと}納^{おと}言^{おと}花^{おと}人^{おと}あ^{おと}し^{おと}あり^{おと}る^{おと}人^{おと}の^{おと}の^{おと}ら^{おと}
ふ^{おと}と^{おと}ら^{おと}る^{おと}は^{おと}わ^{おと}れ^{おと}し^{おと}げ^{おと}ら^{おと}納^{おと}言^{おと}

ふ^{おと}つ^{おと}く^{おと}の^{おと}の^{おと}山^{おと}
雪^{おと}の^{おと}ま^{おと}ゆ^{おと}く^{おと}あ^{おと}と^{おと}い^{おと}き^{おと}ら^{おと}ひ^{おと}じ^{おと}

こ^{おと}の^{おと}じ^{おと}の^{おと}あ^{おと}は^{おと}し^{おと}る^{おと}
おと親王母仲野親王孫養作介正五位下嘉種清和源氏
桂^{おと}の^{おと}女^{おと}の^{おと}あ^{おと}は^{おと}し^{おと}る^{おと}

と^{おと}母^{おと}の^{おと}息^{おと}の^{おと}あ^{おと}は^{おと}し^{おと}る^{おと}
あ^{おと}う^{おと}ら^{おと}れ^{おと}く^{おと}あ^{おと}は^{おと}し^{おと}る^{おと}

く^{おと}さ^{おと}ら^{おと}れ^{おと}く^{おと}あ^{おと}は^{おと}し^{おと}る^{おと}
い^{おと}よ^{おと}い^{おと}し^{おと}く^{おと}あ^{おと}は^{おと}し^{おと}る^{おと}

あ^{おと}は^{おと}し^{おと}る^{おと}く^{おと}あ^{おと}は^{おと}し^{おと}る^{おと}

な^{おと}ら^{おと}し^{おと}る^{おと}く^{おと}あ^{おと}は^{おと}し^{おと}る^{おと}

か^{おと}く^{おと}て^{おと}志^{おと}の^{おと}ひ^{おと}つ^{おと}あ^{おと}は^{おと}し^{おと}る^{おと}

十^{おと}五^{おと}和^{おと}せ^{おと}ら^{おと}れ^{おと}る^{おと}く^{おと}あ^{おと}は^{おと}し^{おと}る^{おと}

あ^{おと}う^{おと}ら^{おと}れ^{おと}く^{おと}あ^{おと}は^{おと}し^{おと}る^{おと}

た^{おと}う^{おと}ら^{おと}れ^{おと}く^{おと}あ^{おと}は^{おと}し^{おと}る^{おと}

監^{おと}令^{おと}悔^{おと}朝^{おと}拜^{おと}の^{おと}威^{おと}儀^{おと}入^{おと}命^{おと}悔^{おと}よ^{おと}し^{おと}出^{おと}る^{おと}

争いもあつたのしるしに
なまふらふに萩萩のちかきさへ
しるしにふとあしこいそくし
こいそくしにきしほあめてなげナゲし
しるし
片一思ひにりしにすいり松竹
とせししと流ナガる
但馬の國よりのいげり兵庫兵庫花花のけし
のふふをよきと女とと糸糸のりひ
雪のちりひよとにさへさるる
處處は前前のりしとくくめては
るしらの

雪の下に
とせししと流ナガる
山はふらふらとたえぬ
ちくしとせんもはさく
にみじろしと流ナガる
はら伊國のちかきさへ
まにあつたのしるしに
はのふのしるしに
はら伊國のちかきさへ
はら伊國のちかきさへ
はら伊國のちかきさへ

君もあつたのしるしに
はら伊國のちかきさへ
はら伊國のちかきさへ

修程の志よしまのこゝすかん多う時方のさ
つらふいふたふぬうらんじま
ひいぬこふかきたし

いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

かくて心のもつふなりよげんえんふて
とせむちをむ

いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

といふもいづれもいづれもいづれも
わーらんがいにいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

又おまーおまーおまーおまー

いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

おまーおまーおまーおまー

いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

おまーおまーおまーおまー

いづれもいづれもいづれもいづれも
いづれもいづれもいづれもいづれも

おまーおまーおまーおまー

このまゝに... 修肥りぬ

そ海... くのの... けり

たの女... ちりま... なくもな

いと... 三糸の右... のつと

げん女... 三糸の右... けり

まじ... 三糸の右... けり

し... けり... せん... わ... へ... ち... けり

故... 中納言... けり... けり

けり... 故... 中納言... けり

物もよと月日のゆくともさくあはれ
こころなきふはるそあはれゆく
となじ有げりふくまじ

いあててく思てふこころ成をり
かくいせつあはれこころあはれ
かくいせつあはれこころあはれ

いあててく思てふこころ成をり

いあててく思てふこころ成をり

いあててく思てふこころ成をり

いあててく思てふこころ成をり

生高元光先

いあててく思てふこころ成をり

いあててく思てふこころ成をり

いあててく思てふこころ成をり

いあててく思てふこころ成をり

いあててく思てふこころ成をり

いあててく思てふこころ成をり

代明親王

定方公女重光保光定光母

いあててく思てふこころ成をり

いあててく思てふこころ成をり

いあててく思てふこころ成をり

いあててく思てふこころ成をり

いあててく思てふこころ成をり

いあててく思てふこころ成をり

いあててく思てふこころ成をり

いあててく思てふこころ成をり

貞信云

源氏歌子

寛平皇女母音亦相女

たはさかしくけし方うせほていそその月よ
あつとくまのこいそいそくせほてん月若
あつとくまのこいそいそくせほてん月若
あつとくまのこいそいそくせほてん月若
あつとくまのこいそいそくせほてん月若

かくれぬ一月はく月してあつとく

あつとくまのこいそいそくせほてん月若

あつとくまのこいそいそくせほてん月若

あつとくまのこいそいそくせほてん月若

あつとくまのこいそいそくせほてん月若

あつとくまのこいそいそくせほてん月若

あつとくまのこいそいそくせほてん月若

貞信云

昌泰三年三月廿八日任巻後

千余年清順公生

清順云

院の

の

の

の

あつとくまのこいそいそくせほてん月若

あつとくまのこいそいそくせほてん月若

あつとくまのこいそいそくせほてん月若

あつとくまのこいそいそくせほてん月若

あつとくまのこいそいそくせほてん月若

あつとくまのこいそいそくせほてん月若

あつとくまのこいそいそくせほてん月若

あつとくまのこいそいそくせほてん月若

あつとくまのこいそいそくせほてん月若

あつとくまのこいそいそくせほてん月若

あつとくまのこいそいそくせほてん月若

あつとくまのこいそいそくせほてん月若

子く孫山女跡の紫いころあつ
い海にふれいのかゆいもい
こみんあやう

しそしきりたあふてふらうはふれい
さうあうこいさういなるん大井の行幸
い海にこらうあひさる

大井は香純の將士はうら子とれのい
いさうをさううくをらあふさうはら
きんあやういふい海にさうわはら
い海にりきりたあふ

らこいあやうい物と大井河
さういさういさういさうい

こあやういさうあふれなるん
さういあふいさういさういさうい

ていさういさういさういさうい
掃部助あて宛延治二年三月癸酉は守る志のま

か波のいさういさういさうい

心地さういさういさういさうい
いさういさういさういさうい
かくあは侍らあふいさういさうい

いさういさういさういさうい
いさういさういさういさうい
あふいさういさういさうい

くまーくそらあてしじに奥ひ

右近侍五位下平家純延暦十九年卒

たのちんさくはあさあーくしてなま

しんまうまふくはくしんせいのま

まうまうまふくはくしんせいのま

しんまうまふくはくしんせいのま

しんまうまふくはくしんせいのま

しんまうまふくはくしんせいのま

しんまうまふくはくしんせいのま

しんまうまふくはくしんせいのま

しんまうまふくはくしんせいのま

まろかくてあひひんこのひのくんはな
くはくもともなひあきあしあはれおま
土佐守ありくるさか酒井人真古今作意かのしん
くまうまふくはくしんせいのま
しんまうまふくはくしんせいのま

行人のまふくはくしんせいのま

平中右近侍五位上貞文仲野親王曾孫治平義世王孫九年將也凡男のま

中子行進のま

のま

のま

のま

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, written on the left page of an open book. The text is dense and fills most of the page.

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, written on the right page of an open book. The text is dense and fills most of the page. A small character '車' (car) is visible near the top right.

の交わが將のことにしてはあついでに三よ
わし百をくらの備後守と稱信明 意知小男わさくもさくしよ
男をなむひらひはあじしりやのたごり
まじりきんかぬいひまひんくくちりきり
いひぬゆはかくしとひぬあしうれらの
例津といひまひいひまひらじ
こまんありまは
かろ一女のらよ共衛尉共人 在 兵 兵 三 中納言 兵 衛 尉りりきりよはひてあ
くといひらりきり風吹わあやりきり目のいひまひらじ
いららせいさよ日くらうしよさくめれと
西といひたよあもあうら
こふもつある

共衛尉共人いれしてのらら時祭のまひい人まひ
くといひらりきり風の女ももれといあつらきり
まの命のいひまひらじ
じいといひらきり
わあつ
かく共衛尉共人いれしてのらら時祭のまひい人まひ
りら
い
い
か
我の女
い

あぬしつ浪ちまじ草々女どなく
しつらぬく祿しよふおぼせ
桂の女にたまふしのふりこのいして今よあひ
そゆりき白くそ屋にゆりけり
袖とよもほのこもり。七夕の
何の想いし下りいらはるる。井
右の衣のたはたしきゆめはあまの義村あ
とらふはあふてぬまじなあめ
秋の衣とまじしたのきこひのい
海とのまじりぬれく。あひ
心なむ
林も。守露も。と祿し心とあむ

しつらぬく祿しよふおぼせ
桂の女にたまふしのふりこのいして今よあひ
そゆりき白くそ屋にゆりけり
袖とよもほのこもり。七夕の
何の想いし下りいらはるる。井
右の衣のたはたしきゆめはあまの義村あ
とらふはあふてぬまじなあめ
秋の衣とまじしたのきこひのい
海とのまじりぬれく。あひ
心なむ
林も。守露も。と祿し心とあむ
しつらぬく祿しよふおぼせ
桂の女にたまふしのふりこのいして今よあひ
そゆりき白くそ屋にゆりけり
袖とよもほのこもり。七夕の
何の想いし下りいらはるる。井
右の衣のたはたしきゆめはあまの義村あ
とらふはあふてぬまじなあめ
秋の衣とまじしたのきこひのい
海とのまじりぬれく。あひ
心なむ
林も。守露も。と祿し心とあむ

なつー女はからのかぶるふて三州有原
のうね真代守三志保生男有次はなはな

Handwritten text in a cursive style, likely a letter or a short story. The text is written in a fluid, connected script. A red seal is visible in the middle of the page, partially overlapping the text.



110X
510
2